短篇小說

小春日

堀内新泉

六

その時、他所の小母さんが、『母さんが御覽でしたら、嘸、まあ、お喜びなさるでしようね』と仰有つたのと、同時に正木の小母さんが手を振つて、『どうして、中々耳が早うございますからね！』と低聲で仰有つたのは、聞えぬような振をして居たけれど、その實、僕の耳には、雷のように徹へた。

それから後と云ふものは、僕の感疑は、いよいよ募つて、母さんから、一寸した事にも睨まれたり、叱られたりする度に、『もし、眞實の母さんがあるならば、會つて見たいな？』といふ心が、明方の小鳥の、光線を慕うように、最う居たたまらなく成つて來た。

七、

その後僕は、正木の小母さんに會うたんびに、『聞いて見ようか、聞いて見ようか』と思つたがその機會を得なかた。

否、毎日のように遊びに行くんだもの！そして、何時も小母さんのお部屋で、丁度、實の母さんと兒のようにして、長い間、いろんなお話をしたり、たまには宿つて、小母さんの白い胸の所に僕の、まだ小さい額を着けて抱いて寢て貰うこともあるんだもの！聞けば、いつでも、聞くべき機會はあつたのだが、ただ、『ア、、僕に若し、眞實の母さんがあつて、斯うして抱いて寢て貰つたら、嘸、まあ、嬉しいことだらうな！と思ふばかりで僕は、まだ、つい、一度も、聞いて見ることが出來なかつた。

人は、誰でも母さんに、抱れて寢た記憶があるだらう。ところが、僕一人には、この記憶が、夢のようにも殘つて居らぬ

それぢや、小兒の時から、僕は、何時も一人で

寐て居たかといふと、左樣ぢやないの！怖い夢、また嬉しい夢から覺めた時は、僕は何時でも祖母さんの懷に、僕自身を見出したのであつた。

八、

小さい疑ひの中に、イヤ違う！僕に取つては大きな疑ひの中に、さすが小供の、螢を追つたり、蟬を捕つたりして、夏も早、大方過した頃、僕と、僕の、スグ次の弟とは、一齊に太い病氣に罹り、家では大騷ぎをして居る中に、洪水に高汐とはこの事か。こん度はまた三番目の弟が大負傷をして、これは入院することに成つた。

この時、また、僕が兼ての切なる思ひは、いよいよ募らずには居られなかつた。何うして？といふに、母さんは、弟二人に就いては、太く心配成すつて、手厚く看護なさつたが、僕一人に就いての取扱は、氷のように冷たかつた。

九月の末になつて、弟二人は本服したが、僕は、尙、小さい枕と親んで居た。

朝夕は、はや、俄に水のような風が吹いて、何處の家でも、好く嚏の聲の聞える頃であつたが母さんも、風の心地とやらで、おなじく枕にお就きなすつた

一日、正木の小母さんが、青い橘柑の初物を持つて、母さんと僕の見舞を兼ねてお出でになり、『奥さん、貴方も一は、皆さんの、長の御介抱疲れで居らッしやいましようよ。切めて孝ちやん丈なりと、私が、暫く、お預かり致しましよう』と云つて下さつた時の嬉しさは、實に飛び立つようであつた。『さあ、母さんは、何んと御返辭なさるだらう？』と、僕は心配して居ると、

『でも、そんな御迷惑をおかけ申しちや』と仰有つた。小母さんは透さずに、

『ナニ、此方さまでさへ御承知下さいますれば』と仰有ると、

『私が斯うして居りましては、碌な介抱もしてやることが出來ませんから、他さまと違ひ、貴方に左樣していたゞけば、誠に結構ではございますが』

と母さんは、何か胸に閊へて居るように仰有つた。小母さんは、好いように云ひなして、母さんに、

いやな氣持を少しも與へず、

『さあ、それちや孝ちやんや、母さまも彼樣してお不快ようですからね、今日から少しの間、おいやでも小母の家に入らして御辛抱なさいな！』

と仰有つて、直樣、抱いて車に乘せて下さつた時の嬉しさは、末だに僕は忘れない。

僕と小母さんとが車に乘つて、ゴロ〳〵と御門の外に出ると、其處に、例の多美が待受けて居て、小母さんにそッと、

『奥さま、何うも有がたう存じます！お蔭さまで、私も今日から安心致します　坊ちやまや、お大切になさいましよ』

と云つて、多美はオロ〳〵涙ぐんだ。

九、

僕は程なく小母さんのお家に行つて、新らしい、軟かい蒲團の上に、快い心地で横はつた。

小母さんは、直樣、名醫さんを招いて、實に、手厚く看護して下さつた。その夜、お父さまが入らして、

『これは何うも飛んだ御迷惑をおかけ申しますが宅に居ては、何分、大勢のことですから、おもふように手當が届きません』

と小母さんに仰有つて、僕の顔を御覽になり、

『ハ、ハ、何うだね？今日から、お前の好きな小母さんに介抱して頂いて嬉しいだらう』

僕は默つて點頭いた。

『ハ、ハ、小供程、不遠慮なものはありませんな』

と仰有ると、

『眞個に、可愛らしいものでございますね！』

と云ひ〳〵小母さんは、美しくお笑ひなすつた。

僕は最う全治らないのか知らん？小母さんが、毎日毎夜かゝりきりで、こんなに介抱して下さるのに、十月の中旬になつて、また或る夜ひどく熱が出た。僕は氷で冷して貰ひながら、殆と夢中で小母さんに聞いて見た。

「ウ小母さん！

『はい、何んですか。孝ちやん、嘸、切なひでしようね！今にお醫者さまも見えれば、お父さまも入らつしやいますよ』

小母さんの、白い、暖かい頬は、僕の痩せた頬

の上に落ちた。

『小母さん、僕の、眞實の母さんは、今、何處に居らつしやるの？』

僕は熱い臭を吐いて、

『えゝッ！』

小母さんは、びッくり成すつて、

『孝ちやんの母さまは、お家に居らつしやるぢやありませんか』

僕は頭を振つて、

『彼の母さんぢやないの、僕を生んだ直實の母さんなの！』

『誰が、何時、そんな事を、孝ちやんに言つて？多美ですか』

『誰も云ひはしないが、僕は、最う、疾から心の中で知つて居たの！』

小母さんは、凝然と、僕の顔を視つめて居らしたが、やや、暫くして、

『あなた、若し、外に母さまがあるとすれば、その母さまに會ひたいですか』

僕は、涙ぐんで點頭いた。

もしかのことでもあつては、思ひの種だと思つたものか、小母さんは涙を拭いて、僕の目も拭いて下さり、

『ぢやア、孝ちやんや、二三日中に、お會せ申してあげますからね、早く、治つて頂戴な！』

僕は、また、點頭いて。

一〇、

人には樂みが、何よりのお藥だ！僕は小母さんの言葉を便りに、苦い〳〵お藥も喜んで飲めば、午后は毎日苦しい〳〵熱にも堪へた。

そして、毎日、『小母さん、今日は母さんが入らッしやるの？今日は入らッしやるの？』と云つて強請んだ。

『はあ、今日あたりは、今日あたりは』

と云つて、小母さんは、毎日僕を慰めて下さるのだが、毎日、小母さんの言葉が虚言になるので、僕は最う、到底も母さんには、會はれまひと思つた。

頃は小春の美しい日であつた。

僕は、フト目を覺して見ると、お座敷の雪のよ

うなお障子に、午前十時頃の、暖かな日がさして、お庭の山茶花の影が墨畫のように映り、それに、秋禽の影さへ生々と動いて居た。

僕は、それを、寐ながら凝然と見て居ると、次の間に跫音がして、

『まあ、何んとお禮を申しわげて宜しうございますやら！』

といふ、聞き馴れぬ女の聲がする。

『いゝえ、最う、あなた！』

といふのは、小母さんの聲だ。

僕は、ハッと思ふと共に、隔ての唐紙がスウと開き、

『孝ちやんや、お目覺めですか』

と小母さんの笑顔！次いで、僕は見知らない、他所の、美しい小母さんが、此方へ一歩、

『オヤ、まあ、大きくなつて！』

と嫣然！その儘駈寄つて、蒲團の上から僕を抱き占め、『オ、ヽヽ』とばかり泣く聲は、僕の身躰中に響き渡つた。

『アヽこれが、僕の母さんだらうか』（をはり）

生徒募集

當所英語科生徒補缺トシテ四名ヲ募集シ入學ヲ許ス志望者ハ明治四十年一月十五日マデニ當所到達ノ日取ヲ以テ願書ニ履歴書及戸籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ尚詳細ハ十二月七八兩日ノ官報又ハ當所ニ就キ承知スベシ

明治三十九年十二月

女子高等師範學校内

第六臨時教員養成所